

子どもゆめ基金 “ふれあいフェスティバル” in 乗鞍

川と山のぎふ自然体験活動の集い

2005年度事業報告書



目 次

日 程	2
実施記録	3-22
参加者名簿	23-24
総括にかえて	25

日 程

< 第 1 日目 >

- | | | |
|-------------------------------|-------------|-------------------|
| 1. 開会式・オリエンテーション | 12:45～13:00 | 講堂 |
| 挨拶 七五三掛 哲郎(乗鞍青年の家所長) | | |
| オリエンテーション 乗鞍青年の家職員 | | |
| 実行委員長挨拶 北川 健司 | | |
| 2. 特別講演 | 13:00～14:00 | 講堂 |
| 『自然体験活動が子どもを育む』 今井 通子(医師・登山家) | | |
| 3. 団体紹介 (事例発表) | 14:15～15:00 | 第2研修室/第3研修室/第4研修室 |
| 4. 分科会 | 15:15～18:15 | |
| 「エコツーリズム&グリーンツーリズムのめざす先は」 | | 第2研修室 |
| 「子ども・学校・ニート」 | | 第3研修室 |
| 「自然体験・農山村体験の事業化について」 | | 第4研修室 |
| 「指導者育成と認定制度」 | | 第5研修室 |
| 「愛・地球博にみるアクティビティ事例紹介」 | | 第7研修室 |
| 5. 夕食 | 18:15～19:00 | |
| 6. 団体紹介 (事例発表) | 19:15～20:00 | |
| 7. 交流会 | 20:00～22:00 | |

< 第 2 日目 >

- | | | |
|---------------------------|-------------|----------|
| 1. 朝食 | 7:50～9:00 | |
| 2. インフォメーション | 9:00～9:10 | 講堂 |
| 3. 分科会 | 9:10～11:50 | |
| 「エコツーリズム&グリーンツーリズムのめざす先は」 | | 第2研修室 |
| 「子ども・学校・ニート」 | | 第3研修室 |
| 「団塊の世代の居場所作り」 | | 第4研修室 |
| 「森林セラピー」 | | 第5研修室 |
| 「冬の森を歩く自然観察会」 | | 第7研修室/野外 |
| 4. 昼食 | 11:50～13:00 | |
| 5. 全体会 | 13:00～14:50 | 講堂 |
| 6. 閉会式 | 14:50～15:00 | 講堂 |
| 閉会挨拶 実行委員長 北川 健司 | | |

開会式

開会の挨拶

国立乗鞍青年の家所長 七五三掛 哲郎

現在多発している子どもたちの事件の裏側に、彼ら・彼女らの体験活動の不足があるのでは、と指摘されている。この集いにお集まりいただいている自然体験指導者の皆さんに、活動の課題、悩みをお出しいただき、皆様の交流を深めていただきたい。



実行委員長挨拶 北川 健司（エヌエスネット）

県下で活動している人々が出会って、交流する目的でこの集いを始め、今回がその2回目となった。昨年の第1回は日帰りだったが今年は1泊2日の日程で、自分たちの課題を共有し、ネットワークでの解決を行っていききたい。今後、県下のネットワーク化を進めて自然体験をよりよいものにしていければと思う。



特別講演『自然体験活動が子どもを育む』

医師・登山家 今井 通子

講演要旨

森林の力に早くから気づき、対策を手がけてきた ヨーロッパの国々

ヨーロッパの人々は、産業革命のとき、すでに人類への影響について考え、様々な自然体験をすすめるための対策や運動を行ってきた。

1848 スロバキアの全国での遊歩道の設置

1901 ドイツ ワンダーフォーゲル運動 = 自然との共生の必要性から出発

1936 フランスのパカンス法 3週間ぐらい都会の人が田舎に、田舎の人は都市に

ストレスを予防し免疫力を高めるために森林の力を活用する必要性がある

日本では 1960 年代、アメリカからの市場経済至上主義の波を受け、その結果、大気汚染・食物汚染が進んできた。そのため、それらを防御する必要が生まれてきた。

塩素化合物が増えると、精子数がへり、ホルモン系にも影響を受ける。また内分泌攪乱作用物質がふえ、アレルギー・シナプスの異常・バランス調整の異常などが起こっている。

子どものからだの変化について、2005 年の報告から見ていく。アレルギー・無気力・・・高校で奇声を発する子が増えてきている。子どもたちの高血圧・肥満などの生活習慣病が 10 年前ぐらいから増え、問題になりだした。子どもたちのストレスの予防処置をしないといけない状況がある。

母性衛生学会によると、世界的環境汚染の治療では「転地療法」が良いといっている。森林には人の生命にかかわる「大気浄化機能」や「淡水環境の保全」「身体機能賦活」などの機能があるからだ。

森林浴に訪れた人々にその理由を聞くと、圧倒的に「自分の健康」を理由にしている。子どもの自然体験が目的なのは 27.8 パーセント。森林保全などの社会的な目的で森林浴をする人はほとんどない。

「森林浴」においては人間との関係の実証的なデータが求められるようになってきた。ストレスホルモンは都市から森林へと環境を変えただけで減る。免疫細胞も、都会で運動しても変わらないのが、森林環境の中にいると活性化する。

健康対策だけでなく、森林の散策機能も合わせて充実させること。

日本は、平均寿命、健康維持システム（医療機関など）ともに世界 1 位にある。

国際的に自然を国の売りとしている国々の事例を見ると、スイスでは山岳の交通機関である登山電車・ロープウェイが発達しており、一方ハイキング道も整備されている。

つまり、健康維持システムだけでなく、森林の散策機能も合わせて充実してきた。

必死で歩かなくても、座っているだけで、「環境を変える」だけで効果がある。ブルガリアでも、オーストリアでも森の散策機能は整っている。スロバキアは経済的に豊かな国ではがやはり全国規模の遊歩道が整っている。

多くの人々が健康のために訪れることができる山岳地帯の交通機能や木道も、自然保護ではなく人の散策を容易にするために整備がされている。

学校教育で使わない脳を使うことで、脳の全てを使うこと

学校では 側頭葉、前頭連合野をよく使う。しかし、脳は全部を使ったほうがいい。

自然に連れて行ったら、脳の全体を使わせることが大切である。自然の中での指示的、教示的な活動は学校教育と同じ脳を使うので、ちがう脳を使ったことにはならない。

川を飛び越えるか自分で考えさせ、自分で飛び越えると、その判断に使った部分が発達する。そして「自分が出来た」という自信が生まれる。

自然の中での活動は、こどもたちが動物としての感覚で、自らの判断を行う。そんな活動をさせることが大切だ。



団体紹介（事例報告）

< A会場 >

ボーイスカウト 坂下 文雄

ボーイスカウトにおける指導者訓練は、大きく2つに分けられる。年齢別に5つに分けられた隊の中で子どもたちを直接指導する隊指導者の養成コースと、成人指導者コースである。隊指導者の養成コースは、導入・基礎・上級の段階ごとに、講習会や研修が行われ、ボーイスカウトとは何かということから教わる。成人指導者コースは、団の運営に関することなど団全体をまとめる指導者であるトレーナー・リーダーといわれる人を養成するコースである。

他に、ボーイスカウトの基準を維持するためにコミッショナーという人がおり、指導者教育の監視、指導者訓練体系のしくみ、といった指導体型全体をみる役割を担っている。それぞれの研修所や実習所での訓練を終えると、スカーフなどを受け取ることができ、服装を見ればどういう勉強をしてきたかが分かる。このような定型訓練の他に、非定型訓練があり、隊リーダーラウンドテーブルや各種技能研究会といった研修が行われている。

< A会場 >

こもれびの里 東白川村里山アカデミー 村雲 和裕

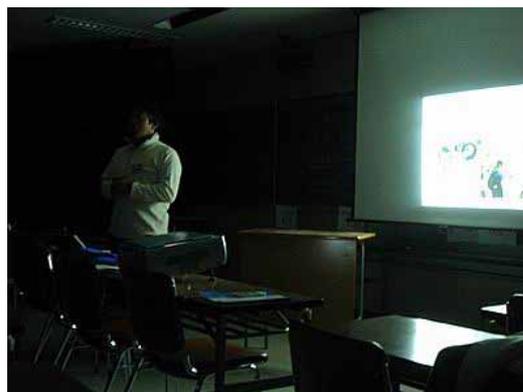
東白川村は、加茂郡の東外れ、下呂温泉の近くに位置する。こもれびの里は、東白川村の山、川、里山を活かした手作り体験や特産品販売を通じて、地域経済の活性化を目的としてつくられた都市との交流施設である。利益をあげることが目的ではなく、たとえばできるだけ事業に関わる仕入れ、雇用は村内でまかなうなど、村の中にいかにお金を流すか、ということを事業目的にしている。今回、より多くのアイデアをとりいれるための新しい組織づくりとして「里山アカデミー」をつくった。メンバーは、農業関係団体、森林組合、商工会、木造建築組合など村のさまざまな団体である。村を対外的にPRするために、村全体が1つに連携し、アイデアを出しあい、協力することを目的にしている。

東白川村は、人口が3000人をきる過疎の村である。少ない人の中で、今住んでいる人がいかに連携していけるかが重要になってくる。地域の活性化のためには、人と人とのつながりが大切である。今後の具体的な展開として、団塊の世代をターゲットにクラインガルテンをつくらうとしている。農地とともにコテージをつくり、都会の人に村にきてもらい、最終的には定住してもらうことが目標である。

岐阜県ユースホステル協会 近藤 聡

岐阜県ユースホステル協会では、子どもたちの通年制の野外教育プログラムとして、「ガリバー冒険隊」という活動を行っている。ここでは、体験活動を再考し、至れり尽くせりの体験イベントではなく、じっくり子どもを育てる創造プログラムにしようとしている。

活動の基本理念は、大きく4つある。「与える」から「自分たちでつくりあげる」ことに重きをおく、結果より過程を重視する、仲間と一緒に作る過程を大切にする、思い



通りにいかないことを乗り越えて得られる満足感を大切に

する、の4点である。具体的な活動は、前半はキャンプ中心の野外活動、後半は子どもたち自身で手づくりの旅をつくる社会体験活動である。野外活動で食事をつくるときは、買い出し・支払いも自分たち自身で行い、旅づくりでは時刻表を使い目的地までの移動の方法から全体の行程までを計画するなど、スタッフは安全管理のみ気を配り、それ以外はすべて子どもたちが中心に動いている。また、子どもたちを育てるだけでなく、学生ボランティアの活用やスタッフの研修にも力を入れ、子どもへの指導を通じて自己を磨いたり、子どもたちにどう関わるかといったスキルを磨いている。

ネイチャーゲーム協会 原 令子

ネイチャーゲームが日本で初めて紹介されたのは20年前、ジョセフ・コーネルというアメリカのナチュラリストが書いた『子どもと自然を分かち合おう』という本の翻訳からであった。現在は、アメリカの活動を一方的に受け入れるだけでなく、もう一步ふみこんで子どもと自然を分かち合いたいとの思いから、さまざまなアクティビティが考えられている。日本独自のものも含み120のアクティビティを、参加者、状況、場所にあわせて組み合わせを行っている。

ネイチャーゲームの具体的な目標は、自然の中で感性を高め、五感を使って自然と一体感を味わうことである。ここ岐阜県にも岐阜県ネイチャーゲーム協会があり、さらに岐阜市・飛騨・恵那山・おくみの・にしみの・美濃路・美濃白川にそれぞれ拠点がある。岐阜県全体には160名会員がいる。今後は、ネイチャーゲームを広める活動をしつつ、ネイチャーゲームという枠のみにとらわれることなく、いろんな活動とつながっていきたく考えている。



< B会場 >

飛騨ツクネル工房 大澤 昌史

ツクネル工房は飛騨生活文化センターで4月まで活動をしていた。渡辺文雄氏が地域の人を集めてイベントをしていこうと声をかけたのが始まりで、昔話の読み聞かせ、農業体験、ツリーライミングなど、グループそれぞれで活動をしていた。そして今は飛騨生活文化センターから自立した。

グループを立ち上げようと思ったきっかけは、マザーアース・エデュケーションの松木正氏が行うスウェットロッジ。これはもともと、ネイティブアメリカンのラコタ族の儀式。直訳すれば、汗の小屋。木を編んで直径5mほどのドームをつくり、上にシートや毛布をかける。ドームの中央の穴に焼いた石を入れ、水をかけ、蒸気の上がる熱い状態にする。だいたい70度ほどになる。10人ほどが入れる真っ暗な中で、汗をかきながら、胎内廻り：精神的な生まれ変わりを体験した。

まだ名前のないグループだが、いろいろなワークショップをやっていこうと思っている。現在は秋神温泉の一角を借りて活動。今年は2回スウェットロッジを行った。来年もスウェットロッジ等企画、皆様にも是非参加していただけたらうれしい。

資金のない中だが、今後は、自分たちで企画してやっていこうと思っている。自分たちが生き生きとし、人とつながっていくような活動を展開したい。



NPO法人ルピナス 細井 恵子

今年5月12日に設立したNPO法人。名前の由来は、ナースは看護師、ルピという言葉はタイ語のルンピー（シニアの意）からとり、組み合わせた。ルピナスはシニアナースという意味で、ある程度経験を積んだナース集団である。

自然豊かな朝日町すずらん高原と、清見三谷に施設がある。活動は7月から、看護を主体に幅広い活動を行っている。会員は40名ほど、理事が6人、現役のナースもいる。60～70歳でも元気な方がいるので、そういう人が活動できる場づくりをしたい。

主な活動は、

- 1、災害看護救援活動：飛騨地区の災害に対して、登録制のナースが避難所での活動ができるようにシステムを検討中。
- 2、ケアマネジャー：山村型在宅ケアサービスの追求
- 3、助産師の理事長による性の健康教育、電話相談など
- 4、子育て支援事業：子育て応援団アサンバ＝事故を防ぐ救急法の講習会を実施するなど子どもからの性の疑問を悩む親へ、どう伝えていけばいいのかということを話しあったり、PTAの出前講座なども行っている。

地域とつながりを持って、活動が広がっているのがよかったと思う。



北方町ふるさと自然発見工房 坂下 文雄

昨年の続きだが、公立の小中学校の土曜日の休みを受けて、教育委員会のもと、子ども達に参加する教室、ふるさと自然発見工房がひらかれる。自然の中での活動、焼き芋や登山、川遊び、実験教室などがある。

自然教室には80名ほどの子どもが参加している。加えてスタッフは20名ほど。活動内容の一つにホタルを養殖し、育てる活動がある。本巣町で飛んでいるホタルの成虫を捕まえてきて、その成虫が生んだ卵を公民館の傍らで育てる。今度、ビオトープを作ってもらった。このビオトープは地下水をくみ上げ、循環させずに川へ流すのでとてもきれいである。

お寺の排水路20mくらいのところでホタルを飼っている。ホタルはカワニナを食べる。そのため餌のカワニナを捕ってこなくてはならない。ホタルがたくさんいるのは喜ばしいのだが、その一方でカワニナを退治しているのでは、と心配。

今、用水路は減っている。人間に維持されてきた環境の中にいたホタルを復活させるのは難しい。



山と川の学校 由留木 正之

長良川上流部、郡上八幡にあり、設立は平成7年。(株)パブリックシステムの5つ目の事業部として誕生した。構成メンバーは専従スタッフ9名、非常勤15名、アルバイトスタッフ130名ほど。様々な経験を持つIターン、Uターン者が集まっている。

活動内容は、

1. 子どもだけの自然体験旅行＝冒険キッズ：地元郡上で8年前から行なわれている。日帰りから長期宿泊型と形態は様々。季節ごとのアクティビティーが盛りだくさん。
2. グリーンツーリズム：4年前から東海、関東圏の生協組合員の親子を対象に2泊3日で実施。宿泊



は地元ビスターリマームで。

3. コンサルタント：4年前から、旧河合村、旧明宝村のグリーンツーリズムでの地域興しをプロデュース。女将の会ビスターリマームを組織化。夏には明宝高原パノラマ流しそうめん大会を行なうようになった。

4. 「里山の袋」：都市と農山村の新しい関係を目指し、季刊冊子の発行と「里山再生トラスト」プロジェクトを展開中。

地元根付いた組織運営で、子ども達が食べる年間2万食の生産加工を地元のおばあちゃん達に依頼、顔の見える関係がやりがいにつながっている。また多数の地元スタッフが故郷の良さを再認識する機会にもなっている。

天生県立自然公園 吉眞 陽子

天生県立自然公園のフィールドは天生峠にまたがる約1,600ヘクタールのエリアで、天生湿原と呼ばれる高層湿原や県内でも有数の広大なブナの原生林が残っている。白川村と以前は河合村、現在は飛騨市で協議会をつくり森林パトロールやガイドツアーを行い、自然保護を軸として、より天生のことを知っていただくとともに正しい自然とのつきあい方を広めていく取り組みをしている。登山道の入口に立つ看板には、協議会の申し合わせ事項として自然を楽しむための基本的なルールが記載されている。内容は、『木道から湿原に踏み入らないように』『歩行中の煙草の禁止』『ゴミの持ち帰り』など。

2年前より入山口では地元のシルバー人材またはパトロールが協力金500円を入山者からいただいている。集まった協力金は自然保護の同時に季節のおすすめの場所や紅葉情報なども教えている。また、数年前から貴重な植物を採る人を取り締まるため、パトロールを強化している。

ぜひ皆さんに、公園内の樹齢200年はゆうに越えるであろう2本のカツラがつくる門(カツラ門)をくぐってもらいたい。



ツリークライミング橙 上田 康美

飛騨生活文化センターから生まれた高山市の団体。飛騨を明るく元気にしよう、都会の人を飛騨へ呼ぼう、とツリークライミングに目をつけた。これまで48年間山に住んでいたが、ツリークライミングをすることで、山、そして木が前より好きになった。

ツリークライミングにはベーシックツリークライマーからワールドツリークライマーまでいろんな段階があり、その中でもファシリテーターという段階になると、自分でイベントを企画し、人を呼ぶことができる。

登り方は、ロープについているチューブの部分に枝にかけ、枝が傷まないようにし、ロープの結び目で登る。

万博で実施してから、イベントの依頼が増えている。これまで3万人あまりの方に体験していただいたが、落ちた人、怪我をした人はおらず、誰でも100%登れる。こどものためのものと思われがちだが、大人も登れるし、日本国内はもとより海外でも障害を持っている人や80歳を過ぎた高齢者も登っている。登る人は、誰かの手を借りるのでなく、自分で登る。インストラクターが、そういった人が登れるようにシステムを考える。登ると人生観が変わる。

派手なアピールをするのでなく、『ロウ アンド スロー』：低いところでゆっくり、の精神をもって活動している。



< C会場 >

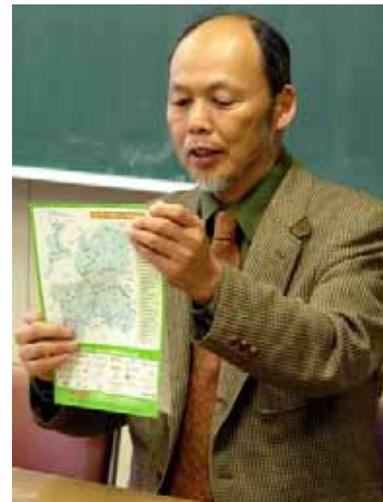
岐阜県キャンプ場協連絡協議会 洞口 健児

岐阜県キャンプ場連絡協議会は岐阜県のキャンプ場を対外的にアピールしようと10年程前に県の商工労働部から補助金を得てホームページを作成、キャンプ場のネットワークを作った。キャンプショーのブースなどでチラシを年5万枚配布し、今では年間40万件以上のアクセスのあるウェブサイトになった。岐阜県にはキャンプ場が約180カ所あり、全国3位。最初は6団体だったネットワークも現在30団体が参加し、「組合」として運営している。

ホームページではカレンダーで参加団体のキャンプ場情報や空き状況を常に更新、利用者は日程や都合にあったキャンプ場を探ることができる。その結果、色んな所からお客が来るようになり、同時に人件費削減にも役立っている。

スタッフは登録制。自分のスキルを活かせる老若男女が登録、参加30団体の中で募集があった時に優先的に紹介し、どんどん活躍してもらおう。

キャンプ場も色んな形態があり最近はおートキャンプ場が多くなってきているが、プログラムを提供したり、静かに家族で過ごすことを目的とするお客を選ぶなど宿泊施設として確立させるための工夫も取り入れていっている。



分科会

ロングセッション

1. エコツーリズム&グリーンツーリズムの目指す先は？

記録者：大西 真紀、浅川 久美

ゲスト : 上平 尚(五色ヶ原ガイド)
小林 由幸(岐阜県農政部)
平野 達也(日本エコツーリズム協会、ホールアース自然学校所属)
松下 和(天生県立自然公園ガイド)
水野 光良(グリーン体験宿)

コーディネーター: 中澤 朋代(自然体験活動指導者トレーナー)

参加者 : 12人(1日目)/17人(2日目)

1 日目

<分科会の目的・論点>

エコツーリズムとは体験交流の考え方やしくみであり、ガイドやその受け入れの仕組みによって、地域の資源とツーリストをうまくつなげることが課題となっている。

今回は、

何のために体験型ツーリズムをやるのかの見直し

現場にある都市と農山村のギャップを埋めるにはどうしたらよいかという2つのテーマを提示した上で、参加者の中で課題を整理し、意見を出し合った。

<ゲストからの事例報告>

上平: 五色ヶ原では、「自然との共生」を基本コンセプト

にしている。道をつくる時は、必要な石などの材料は、現地にあるものでまかない、環境を維持しながら手づくりでつくってきた。また、自然資源の利用と保全のバランスをとるために、入山料と地元ガイドの同行を入山の条件としている。入山規制をしてからお客さんが増えた事例として注目されている。

松下: 公園の運営は、白川村、旧河合村の官・民の諸団体からなる地域の協議会によりなされている。

ガイドを地元で養成し、年間4回のガイドツアー行っている。500円の環境協力金により、木道の整備、パトロールなどを行っている。

水野: グリーン体験宿は、グリーンツーリズムの実施主体として、修学旅行の受け入れなど農村と都会住民との「ふれあい」と基本とした体験交流事業を行っている。近年は都市と農村をつなぐ架け橋として大学生の援農に力を入れている。課題として、マンネリ傾向がみられ、新しいメニュー開発などを模索している段階である。

<参加者によるワークショップで出された論点>

エコツアーを体験する側が求めているものと、受け入れ側として提供したいもののギャップは何か？

- ・体験する側 いやし、リラックス、美しい景色、非日常体験、農村生活体験、地元の食、手作り体験、自然体験
- ・受け入れ側 食育、自然のすばらしさ・保全の必要性、感動・満足感、農山村の魅力・不便さ、人との出会い



2 日目

<現場からの事例報告と制度づくり側からの報告>

三島：山と川の学校は、明宝を拠点に「冒険キッズ」をはじめとする四季折々の自然体験・農山村体験を提供している。他に、機関誌「里山の袋」の発行、耕作放棄地を都会の人と一緒に再生することをめざした、「里山再生トラスト」という運動を行っている。課題としては、サービスを介して都会側と田舎側の出会い方が対等でないこと、両者の意識にギャップがあること、都会のニーズの収集と集客を進めるために都会の中に受け入れの窓をつくる必要があることなどがある。

平野：日本のエコツーリズムの普及推進組織として、日本エコツーリズム協会がある。現在の主な役割として、エコツーリズムの認知度を高める、人材育成ランスをどうとるか？ということがある。

小林：県では、行政側として都市と農山村をマッチングさせるための事業を行っている。「情報戦略」として、大都市に岐阜をアピールするDVDの制作やフェアの開催、「人づくり」としてグリーンツーリズムインストラクターの養成、「地域づくり」としてモデル地域の支援、といった3つの柱で進めている。今年度はニーズの掘り起こしのためのモニター体験ツアーも実施した。



<ワークショップによって出された論点と対策>

「都市と農山村のニーズの差異から見える課題」

- ・情報提供側と参加者の目的がかみあっていない
ネガティブなこともポジティブに表現する、具体的で分かりやすい情報を提供する
- ・本物と本物体験とのギャップ
お客さんが主役になれる・感動を与えられる活動にする、体験活動をシステム化する
- ・田舎暮らしのイメージと現実のギャップ
都会の人々が求めているものを見極めつつ、そのギャップを魅力、商品とする
- ・客の個人主義と受け入れ側の思い
双方が一緒に成り立つしくみ・ネットワークをつくる、受け入れ窓口を都市につくり、地域で活動をする人と結びつける、都市のニーズから活動内容をつくっていく

<まとめ>

中澤：今回の分科会では実践者・体験参加者・研究者・行政関係者が共に席を並べ、横断的に情報と課題を共有したことが最大の成果だった。今後の動きに期待したい。

2. 子ども・学校・ニート

記録者：村上 欣央

ファシリテーター：三浦嘉門（NPO法人メタセコイアの森の仲間たち）

ゲスト：田中 伸一（郡上市立川合小学校）

田中 博（飛騨市立宮川小学校）

川島 伸行（NPO法人キャリア開発支援センター）

長谷川 智宏（岐阜県BBS連盟）

参加者：10名

フェーズ アイスブレイクとこの分科会の目的の共有

ニートはコミュニケーションが不足していると言われるが・・・私達は大丈夫？

アイスブレイクしながらチェック！

巨大松ぼっくり投げ自己紹介ゲーム

他己紹介&報告ゲーム

フェーズ ニート・フリーターの概要を把握する！その実態！

<現状分析>

「フリーター・ニートの現状と行政施策の現状について」 川島伸行

フリーターとニートの違い、行政間での解釈の違い

	フリーター（*）	ニート
厚生労働白書（厚労省）	アルバイト・パートなど短期的・期間的就労に就いている、もしくは希望する者。正社員になりたくない人。209万人（当該人口の10%）	若年層無業者。 4つの「非」。 非就業 非求職 非通学 非家事 64万人。
国民生活白書（内閣府）	アルバイト・パートなどの短期的・期間的就労に就いている、もしくは失業中のもの（アルバイト・パート含めて正社員への就労を希望する者）。正社員になりたくてもなれない人。417万人（同21%）	通学していない独身者で、収入をとまなう仕事をしていない15才以上34才以下の個人。無業者のうち、非求職型および非希望型の者。

*フリーターはともに、在学者と既婚女性を除く15才から34才の者

急増の背景

- ・企業の採用行動や人材戦略の変化 人件費の柔軟な調整ができるフリーター層、非正規労働力の導入
- ・他にも家庭的背景や学校教育の問題、若者の価値観の変化などの原因が絡み、今後も増加の傾向。特に年収300万円以下の家庭において増加中。これまでは親の経済力のため若年層の貧困が見えにくい状況であったが、親世代の経済力低下により表面化している。

社会的問題点・・・長期化するフリーター

- ・所得水準が低い（生涯賃金は標準的な正社員の4分の1）、納税・貯蓄・消費水準の低下。
- ・未婚・晩婚・少子化の加速 各種社会保障制度への負担増大
- ・転職がキャリアアップにつながらない

行政施策の現状 「若者トライアル雇用制度」「ジョブカフェ」（厚労省）等

農業・林業など自然のフィールドを活用した活動事例



フェーズ ニートになる外部・内部・中間要因を分析

<映像資料> NHKクローズアップ現代「仕事をください ～若者を襲う就職難～」28分

<要因>

外部要因(社会): 雇用形態の変化・就職難。

仕事を通した人間関係がない、先がみえない、未来がないといった閉塞感

「意欲がない」「甘えている」という従来の見方とは異なる本人の力ではどうにもならない部分。

内部要因(個人): 失われていく「生きる力」。若者の価値観の変化(特に、労働目的において「楽しい生活のため」とする若者が急増)。ストレスに対する耐性、未経験の事態に対する適応力がなくなっている。

中間要因(地域): 家庭・学校などでの異年齢・異世代間コミュニケーションの減少。

地域を再生しながら雇用を生み出す

文化社会活動・NPOの活動などを活かした一人ひとりに合った自立支援策が必要

ニート予備軍の存在 15歳以下の子どもたち(統計の対象外)

*ひきこもり、不登校がニートになるとは言い切れないが、様々なタイプがあり、精神医学的なアプローチが必要な場合もありえる

<様々な問題点>

- ・無反応な子どもたち
- ・「朝日・夕日を見たことがない」「自然の風景を描くという課題で、窓枠を描いてしまう」など自然体験の欠如
- ・子どもが冷めてきている(刺激に慣れすぎている)。「そんなことは知っている」や「そんな難しいことはできない」等の言葉が聞かれる。
- ・対人コミュニケーションが下手 自分の思いが伝えられずすぐに切れてしまう子ども。
- ・辛抱できない(ストレス耐性がない)

<予備軍となる原因、なりやすいタイプ>

- ・真面目な子がなりやすい。わがままを言わずに、言われたことをこなす指示待ちタイプ。
- ・成績で言うと、中の上が最も確立が高い。(上位10%、下位10%は問題ない)
- ・家庭・学校における過保護状態。子どもを王子様・王女様扱いしている。小さい頃からの辛抱の積み重ねや労働経験(お手伝い等)がないこと。
- ・子どもの時間が失われている。塾・習い事・スポーツ・・・大人のやらせたい気持ちは、子どものやる気ではない。継続的に没頭できる感動体験がない。
- ・情報が溢れすぎているため、思考能力はその選択が中心になりがちで自分で人間が本来持つ能力を働かせなくなり、「生きる力」「考える力」を育む機会が失われてきている。
- ・消費社会が進むほど「生きる力」は失われていく。(買えば買うほど弱くなる生活力)

<対策>

- ・自信を手に入れていくための適度なハードルの設置
- ・地域の人々との関わり(異世代コミュニケーション・共同体構成員としての実感を体験)
- ・社会が子どもに可能性や夢を示す
- ・ひきこもって一人ぼっちになってしまったら、堂々巡りの思考に陥るのではなく、行動することによって突破口が作られる。
- ・現在の親の世代にすでに課題を抱えている状況 親に刺激を与える(親の世代への自然体験活動等)
- ・失敗しても周囲がサポートできるしくみづくり

フェーズ 実際の事例から本質を見出す！参加者報告！

< 事例 >

小学校4年生

以前からとても真面目な子、わがママを言わない子、何でも黙々とおこなう子

ある時期から授業中に具合が悪くなるなどの症状
不登校化

保護者と相談しても直接の原因が思い浮かばない。

心身の成長にともない、親と教師、周りの友達たちからの期待に応えられなくなるときがあるのではないか？

(自身の多面性を表現できていない。)

マンガを描くことが好きで、マンガの中で自分を表現することで自分を開放している。

(マンガの中では、普段使わない「バカヤロー」「コロス」「クソ」などの言葉を多用している)

徐々に症状が改善してきている。登校する日もあり、長い目で見てあげることが必要と感じている。

< 事例 >

中学生

真面目でわがママを言わない生徒 原因やきっかけがつかめないまま不登校化

その後、学校側は継続して情報を家族や本人に伝えていく努力をしている。

カウンセラーと相談し、ノートを1冊作成。学校へは来られないものの、このノートを通して教師や同級生との交流をおこなってきた。

その後、不登校の子どもたちが集まる場に参加

卒業式まで不登校状態は続いたが、その子のためだけに同級生が協力して卒業式をおこなうなどコミュニケーションは継続

卒業の進路は本人の意思で決定 中間定時制の私立高校へ進学、現在は社会人として就業中。(ノートにはならなかった)

原因は不明だがコミュニケーションを絶やさなかったことが改善につながったのではないか？

親や教師からの指示や要望、期待を全てをこなそうとする子ども(真面目で文句を言わない子)

できなくなったときに自分の価値を見失い、精神的損失感、劣等感、違和感を感じ落ち込んでしまう
ある程度の適当さが(臨機応変さ)がある子どもは大丈夫

< 映像資料 >

「千と千尋の神隠し」

主人公である千尋の言葉・行動、千尋への言葉・行動の変化

「ここで働かせてください」「ひよろひよろに何ができるのかい?」「いくらでも代わりはいる」

「わかんないことはオレに聞け」「よくやったね、千」お客さんにおじぎをする千

認められる存在へ

現代の子どもたち

サービスの受け手側から、サービスの提供者側にまわる衝撃

「働かせてください」という機会があるのか？

フェーズ 確信！ノート対策には自然体験活動のこの部分が有効だ！

< 活動報告 >

小学生1年生：地域の自然の中で食を通した自然体験をする機会

「採って食べよう 栽培して食べよう 加工して食べよう」

・ツクシやヨモギを採取して食べ、自分たちで最初から作った畑でジャガイモや大根などの野菜を栽培



して食べる。

- ・栽培する野菜も子どもが自分たちで決定。
- ・生活体験の中で子供が工夫を積み重ねながら成長する
- ・食物を食べるまでの工程の大変さが分かると同時に達成感と日常生活への確かな自信が生まれる。
- ・作った料理をとおして家庭での話題が広がり、家族と話す機会が増える

< 活動報告 >

乳幼児・出産前の親を対象にした啓蒙活動

- ・クラフト教室や伝統芸能、昔遊びの体験教室
- ・母親たちが車座になって座り話し合う 本音を吐き出す場所、雰囲気作り
- ・母親たちの受講の間、託児を地元の中学3年生に依頼、小麦粉粘土遊びを体験
- ・中学生の腕のなかで眠る乳児...中学生にとって、こういった経験が必要！これから親になっていく世代にとってリアルに命を感じる機会

< 整理 >

自然体験活動の何が有効なのか？

- ・自然には嘘偽りがない。自然体験にはリアリティーがある（危険との直面・生きている実感）
- ・自然の中では実際に行動しないと乗り越えられない チャレンジして乗り越えていくことが必要
- ・自然体験は全世代に共通の体験 異世代・異年齢とのコミュニケーション
- ・現代の生活では切り捨てられてしまったものを体験できる

フェーズ そして未来へ！我々の仕事、他機関との連携を考える

- ・学校とNPO等の連携をすすめる
- ・地元の人との連携をすすめる
- ・厚生労働省の事業を活用する

< まとめ >

子どもたちのニート化を防ぐために有効な4つの自然体験活動

苦勞して、あることを乗り越えていくことができる自然体験活動

自分や他の命に対するリアリティーを感じることができる自然体験活動

異年齢・異世代とふれあうことのできる自然体験活動

臨機応変性が求められ、子どもにとって答えが複数あることを経験的に学べる自然体験活動

これらを融合して作られたプログラムが、各団体・所属組織で活用されることを願う。

ショートセッション

記録者：水田 理沙

3．自然体験・農山村体験の事業化について

コーディネーター：千葉 篤志（メタセコイアの仲間たち）

ゲスト：三島 真（山と川の学校）

牛澤 功（里山むら）

中島 輝雅（飛騨位山ふるさと学校）

参加者：26人

<分科会の目的・論点>

電気設計会社の資材課長だった男が、年間1万人を集める『冒険キッズ』という事業を立ち上げるまでの経緯をモデルにしながら、自然体験、農村体験の事業化を目指す参加者と、立ち上げから運営の仕方までを検証する。

<ゲストからの事例報告>

『冒険キッズ』を例に

『冒険キッズ』は、子どもだけで参加する自然体験旅行のこと。

大自然のすばらしさや、農山村の自然と結びついた豊かな暮らしを体験してもらうために、自然体験のサポートスタッフと地元のおじいちゃんおばあちゃんが力を合わせて、子どもたちに冒険に満ちた体験旅行を提供している。

現在、東海地方を中心に年間1万人を超える子どもたちが参加しており、四季折々の自然体験は彼らに机上の学習では得られない貴重な変化をもたらしている。



<問題点の提示>

ボランティアとは、無料で社会事業に奉仕することをいう。ボランティア活動のような自然体験や農山村体験を事業化し、発展させていくのはとても困難なことだ。

事業化するための資金はどう工面するか。お金が入らないと事業として成り立たない。どのようにして人を集め、お金をもらうか。

<解決策>

事業として成り立たせるためにはまわりの協力が必要である。自然体験や農村体験には地域の人の協力は必要不可欠だ。地域の自然の良さをみんなで伝えることに意味がある。特に、お年寄りの人たちのように昔から地域の自然と触れ合い、自然を利用して遊んでいた人たちの協力は得ておくべきである。

事業を周知させるためには、ありふれたものではない目を引くキャッチコピーを考える必要がある。子どもが対象の事業なら、「面白そうだ。興味がある。子どもたちに行かせてみよう。」と親に思わせるキャッチコピーを考えることが大切である。

4．指導者と認定制度

記録者：入江 鐵夫

コーディネーター：北川 健司（エヌエスネット）
ゲスト：手塚 友恵（日本山岳ガイド協会）
重 政子（自然体験活動推進協議会）
参加者：16人

<分科会の目的・論点>

指導者の認定制度や指導者のスキルアップ、育成などを話題に、情報提供や各団体の持つ悩みや問題を語り合う。

<ゲストからの話題提供>

重：これからのCONEの役割として大事なことは、どこに意識を持っているかである。例えば、子どもをフィールドに連れ出し、やりたいことを企画させる。そして自信を持たせ、学ばせる中で、子ども自身の成長を促すこと等が重要である。手塚：ガイドの認定には1次、2次試験があり、2次は有雪時、無雪時のガイド、実技など8項目からなり、特にプロとしての安全管理ができなくてはならず、合格率は低い。審査員は、認定審査会の検定員による。



<質疑応答>

厚：行政が地域連携のためにCONEの登録をどの程度活用しているか。

重：行政の縦割りの中で地域連携がなかなか進んでいないが、ようやく文科省がリーダーシップを取って、役所が集まり、検討会を始めている。

小椋：ガイド試験に合格すると何かメリットがあるか。

手塚：今はそうでもないが、クオリティの違い、特に国際基準からして安全を得るという意味でメリットが出てくる。

<主な意見>

手塚：今までは全国の基準に合わせてやってきたが、今後は団体としての公益のよさを生かし、地域性を加味していきたい。

重：CONEのトレーナーの養成講座を今後他の動きにつなげていきたい。

小椋：ガイドなどを法制化していくとよいのではないか。

北川：ガイドを付けて入ると自然が守られる。

長田：お客からお金が取れるには、お客を楽しませることが必要であるが、高いクオリティと安全の確保が前提である。ラフティングの資格はそのことに重点が置かれている。

吉眞：天生はリピーターが多い。それはガイドの人がよくて温かみがあり、またフィールドがよいからだといわれる。

村瀬：一団体では限界がある。こういうネットワークでの協力が必要である。

5. 愛・地球博にみるアクティビティ事例紹介

記録者：高屋 良平

コーディネーター：小木曾 賢一（森林たくみ塾）
ゲスト：竹内 ゆみ子・高田 尚子（特定非営利活動法人ソムニード）
佐々木 タ（愛・地球博『森の自然学校』インタープリター）
富田 宇男（愛・地球博『里の自然学校』インタープリター）
参加者：5人

<分科会の目的・論点>

過熱気味の企業パビリオンの一方で、森・里の自然学校ならびに地球市民村の活動が人々の意識に働きかけたものは少なくない。実際に活動したインタープリターたちはどのような工夫を凝らしたのだろうか。そしてそこから見えた次への課題は何だろうか。

<ゲストからの話題提供>

竹内・高田：「どのようにして関心の薄い人たちに活動メッセージを伝えるか」

- ・分かりやすいコンセプト 「ジャングルが消える」とカレーが消える」
- ・現場での変化 説明型から参加型へ
ゲーム感覚の展示（「動物探し」など）、クイズ的要素（「森がどう変わった？」など）、本物に近いものを（牛糞のレプリカなど）、体験型（スパイスつぶし体験など）
- ・どのようにして「惹きつける」ものから「伝えたいもの」を引き出すか。



佐々木：「セルフガイドツアー」の仕掛け作り - 「森遊びセレクトツアー」

- ・参加者の想定 ベビーカーから高齢者まで、障害者、外国人、自然に関心の低い人
- ・準備・始動期の工夫 プログラムへの参加のシュミレーション、得意分野での作業の分担化、来場者が楽しめる仕掛け作りなど
- ・転換期の工夫 もっと楽しめる空間づくりの工夫（「モリゾーが見てる」など）、参加者が主体となる工夫（書き込みボード「森の句会」など）、チーム内での「小ネタ集」作り、新プログラムの開発（「わくわく森体験コース」、「ハテナ？マン」、「落ち葉の神経衰弱」など）

富田：「里の自然学校」について

- ・テーマ - 「土と里」
- ・参加者層の変化 業界関係者から一般の人たち（森へ入りたいという欲求が強い）に拡大、口コミで参加者拡大、子どもをつれてくる親など
- ・参加者の反応 楽しかった、明日へのエネルギーになった、森を忘れえいたことに気づいた、子どもにはいい体験になった、など
- ・インタープリテーションで難しかったこと 時間配分、参加者の安全管理、天候判断など。具体的対応として、インタープリター間の情報交換・情報共有を進めた。

<まとめ>

- ・自然体験に対する潜在的ニーズがある（ボランティア・スタッフの先入観を越えていた）
- ・年齢層による反応の違い - 子ども：体験に興味、高校生・カップルも楽しんでた（森の自然学校）
参加者がマスコミ情報とは違う本物を体験した。
- ・当初の予測を超えて参加者・スタッフの質が向上した。（「沁み出し効果」）
- ・愛・地球博でのインタープリター体験はよい人材育成の機会となった。

6．団塊世代の居場所づくり

記録者：入江 鐵夫

コーディネーター：高田 研（岐阜県立森林文化アカデミー）
ゲスト：柴田 甫彦（長良川環境レンジャー協会）
高屋 良平（エヌエスネット）
加藤 昌孝（東海シニア自然大学）
参加者：23人

<分科会の目的・論点>

岐阜県では今後5年間で約17万人が退職年齢60歳を迎える。団塊世代の方々の居場所として簡易ロッジやキャンピングカーなどに長期滞在し、のんびりと自然を楽しむ姿をよく見る。この問題について自然体験施設・プログラム・生き方の面から考えてみたい。

<ゲストからの話題提供>

柴田：やめて何をしたらよいかを55歳位から考えてきた。小遣いも年金も減ると大変である。ボランティアに専念するのもまた大変である。そんな中で環境レンジャーは、主に長良川流域のゴミの収集と啓発及び子どもの教育への参加を行っている。

高屋：30年間の高校教員を辞めて、2001年にエヌエスネットの立ち上げに参画した。今「私生活>仕事」の中で新しい価値観が求められ、その一つに自然志向がある。そしてそのためには情報の積極的入手と仲間づくりが必要である。

加藤：トヨタ系の会社を辞めてエコワークスに入り、2004年9月にシニア自然大学の立ち上げに関与した。お金は一銭ももらっていないが社会貢献しているという満足感がある。退職後の生活は、明るいイメージを持って生活設計を描くことが何よりも大事である。



<居場所づくりのための3つの提案 - 3グループの討議から>

第1グループ

- 1．都会から田舎へ、田舎から都会へ等の「移住」により、生活（人生）をリセットする。
- 2．森林セラピー等より、ストレス社会をつくり、健康で長生きする。
- 3．「本物のボランティア」を養成し、経験、スキルを社会還元する。

第2グループ

- 1．先人の知恵袋になる。異年齢と異世代を繋ぐ。
- 2．居場所づくりのための人材育成（コーディネーター、繋ぎ役）が必要である。
- 3．男性をどう引き出すかが問題である。（プログラムが必要）

第3グループ

- 1．楽しむこと、楽しませることの創出、いわゆる「間」作りが必要である。
- 2．ボランティアと働くという社会的参加の中で、お金とボランティアをどうスマートに結びつけていくかが問われる。

7. 森林セラピー

記録者：水田 理沙

コーディネーター：川尻 秀樹（森林インストラクター岐阜）

ゲスト：伊藤 栄一（森のなりわい研究所）

井川原 弘一（森林科学研究所）

森田 えみ（森林インストラクター）

河原 誠司（南飛騨国際健康保養地 健康増進センター）

参加者：16人

<分科会の目的・論点>

近年脚光を浴びている「森林療法」を中心に、それを推進する森林分野の行政、研究、分析、自然体験の新たな可能性を探る。

<コーディネーターによる情報提供・問題提示>

森は健康にどんな影響を及ぼすか？

癒し効果 医療効果

問題点（四美の森、公共施設）

- ・プログラム開発、セラピーフィールド、etc....
- ・テーマをどうとらえるかはっきりすれば何をすることも少しわかる。

健康増進と森林浴

- ・林学から見た森林浴 - 森林浴で元気になりたい。
- ・医学から見た森林浴 - 社会医学、公衆衛生学に含まれる。臨床医学、温泉、精神科、老年医学

健康増進

予防 - 治療 - リハビリ

森林浴 森林療法

森林浴とは、栄養、運動、休養である。

森林分野、経験的に、自明 - 医学効果かはあまり認知されていない。健康関連分野を広げていくためには、医学理解が重要。

“どのような方法をたったら、どんな人たちに、どのような効果が期待できるのか”

森林浴も森林セラピーもほとんどかわらない。

効果 - 保養効果、体力増進、教育増進、（この三点にはソラクゼーション効果がある）

ソラクゼーション効果をどうはかるかということ、主観的評価、客観的評価、心理指標、生理指標ではかれる。

<ゲストからの話題提供>

鈴村：昔の木造校舎から、鉄筋校舎にしたときから、子供たちの精神が乱れている。

井田原：データ化したほうが信憑性があるので、今後はデータの蓄積が大切。

上田：木の家に住んだら、子供のアトピーがよくなったという事例がある。原因はマイナスイオンなので、小、中学校に樹木を増やすべき。

川瀬：広葉樹が一番癒し効果がある。

人工樹では癒し効果が少ないのでは？データをとったところ人工樹でも癒し効果はある。

<まとめ>

森林浴は、森の健康療法のトップである。みんなで行動をおこし、森のよさを示していくべきだ。



8. 冬の森を歩く自然観察会

記録者：常川 領太

講師：小野 木三郎（飛騨ふるさと歩こう会）
梶浦 敬一（エヌエスネット飛騨美濃自然学校）
担当：小西 清明（国立乗鞍青年の家）
参加者：23人

< 活動内容と講師トのコメント >

小野木

実際に冬の森の中を歩いて木を見てそれぞれの木の違いを見つけたり木を見て思ったことを俳句にしたりする。

木を見るときは、事実を読み取る「観る」ことが大切である。

梶浦

動物の骨を使っての動物の紹介。このあたりの森で撮れた動物の写真を元に梶浦さんが体験したことや、その時の動物の行動などの紹介。

糞が動物を発見するのに良いフィールドサインになっている。



動物の頭骨の観察（梶浦講師）



降雪の中の冬の森観察（小野木講師）

閉会式

司会進行：川尻 秀樹

始めに全員に赤、黄、緑の3色カードを配り、旗揚げ方式のアンケートを行った。最も多かった回答のは以下の通りであった。

所属もあり、活動もしている。

自然活動をライフワークとしている。

来年も来たい。

分科会報告

「指導者育成と認定制度」：北川 健司（エヌエスネット）：

「団塊世代の居場所作り」：高田 研（岐阜県立森林文化アカデミー）：

「グリーンツーリズム&エコツーリズムってなあに？」：中澤 朋代（自然体験活動指導者）

「子ども・学校・ニート」：三浦 嘉門：（メタセコイヤの森の仲間たち）

「自然体験・農山村体験の事業化について」：千葉 篤志（メタセコイヤの森の仲間たち）

「森林セラピー」：川尻 秀樹（森林インストラクター岐阜）

「愛・地球博にみるアクティビティ事例紹介」：小木曾 賢一（森林たくみ塾）：

閉会の挨拶 実行委員長 北川 健司（エヌエスネット）

乗鞍の厳しさは想像できたが飛騨でやってよかった。岐阜の場を感じた。そして120名の多くの方に参加していただき内容も本当に充実したものになった。特に飛騨の名人の尾藤さん、小林さんには心からお礼を申し上げたい。今後ともフィールドに遊びに行く機会を作っていきたい。

みなさんそれぞれが、自分と抱えているのと似たような疑問や課題が出てきていたのではないだろうか。この集いは、集って、交流して、何かを起こすというのがねらい。1年後には何か起きるだろうと期待できる。私たちは大きな河川に目を取られがちだが、小さな流れも大事だとあらためて思う集いになった。



参加者名簿

氏名	所属団体	氏名	所属団体
足立 美穂	兵庫県野外レクリエーション指導者協議会	鈴木 慎吾	NPO 法人ぎふし森守クラブ
足立 一		田口 洋介	ツリークライミング クラブ橙
足立 小枝子		田口 勝	五色が原
渥美 宣二	岐阜森林援護隊	高井 哲雄	岐阜県ワシタカ環境レンジャー
有本 信昭	岐阜大学地域科学部	田村 明	朝日大学経営学部ビジネス企画学科
青山 雅行	勤労者山岳連盟	武田 芳男	じゃんたら自然塾
伊藤 修宏	森と水辺の研究会	都竹 祥子	
五十川 修	環境省自然公園指導員	戸阪 康司	飛騨インタープリター協会
伊藤 修也	シーガルヨットクラブ	中澤 治雄	岐阜県西濃地域農山村整備事務所
石川 裕子	メタセコイアの森の仲間たち	中西 喜和	ツリークライミング クラブ橙
入江 鐵夫	岐阜県森林文化アカデミー	中屋 妙子	乗鞍山麓五色が原森の案内人
石際 淳	岐阜工業高等専門学校	中川 雄介	パスカル清見
伊藤 尚哉	高山西小自然体験クラブ	中川 真佐子	名古屋文理大学
上田 康美	ツリークライミング クラブ橙	中西 喜和	
内海 洋太	森林インストラクター岐阜	原 令子	岐阜県ネイチャーゲーム協会
内田 純子	メタセコイアの森の仲間たち	長谷川 真奈美	メタセコイアの森の仲間たち
遠藤 兵庫	関市立武儀東小学校	尾藤 政勇	南飛騨自然塾
太田 春代		日置 俊之	トヨタ白川郷自然学校
荻巣 雅俊	岐阜県林政部	古田 茂和	NPO 法人ひだ位山ふるさと学校
小粥 康正	じゃんたら自然塾	細井 進	NPO 法人 ルピナス
小椋 美知男	乗鞍山麓五色が原森の案内人	細井 恵子	NPO 法人 ルピナス
大澤 昌史	飛騨ツクネル工房	洞口 健児	岐阜県キャンプ場連絡協議会
河合 高志	岐阜県林政部林政課緑化運動担当	増田 勉	増田工芸
川瀬 健一	NPO 法人ぎふし森守クラブ	松波 陽子	
加藤 裕章	NPO法人長良川自然学校	松波 康裕	
熊崎 浩之	飛騨小坂フォレストガイド	水谷 嘉宏	森林インストラクター岐阜
近藤 聡	岐阜県ユースホステル協会	宮ノ腰洋子	野遊びくらぶ
神山 輝男	NPO 法人ぎふし森守クラブ	村瀬 典康	長良川環境レンジャー協会
小林 繁	秋神温泉旅館	村瀬 邦子	オークビレッジ森の自然学校
小林 洋子		村雲 和裕	こもれびの里・東白川体験倶楽部
坂下 文雄	ボーイスカウト	山田 俊行	トヨタ白川郷自然学校
佐々木 豊光		山本 喜美江	
四方 祐子		山本 孝子	飛騨教育振興事務所
清水 美奈子		山口 早苗	
杉山 美千代	NPO 法人 森と水辺の研究会	由留木 正之	山と川の学校
鈴木 偉代		吉眞 陽子	天生県立自然公園協議会

スタッフ・講師

氏名	所属団体	氏名	所属団体
浅野 純一	NPO法人エヌエスネット	田中 博	飛騨市立宮川小学校
浅川 久美		田中 康裕	
今井 通子	社団法人日本山岳ガイド協会	高田 研	岐阜県立森林文化アカデミー
手塚友恵	社団法人日本山岳ガイド協会	高屋 良平	NPO法人エヌエスネット
伊藤 栄一	森のなりわい研究所	高田 尚子	NPO法人ソムニード
井川原 弘一	岐阜県森林科学研究所	竹内 ゆみ子	NPO 法人ソムニード
飯沼 紘子	岐阜県立森林文化アカデミー	田中 久治	国立乗鞍青年の家
牛澤 功	小鳥振興協会(飛騨清美里人むら)	千葉 篤志	メタセコイアの森の仲間たち
小野木 三郎		常川 領太	アウトドアサポートシステム
大西 真紀	岐阜県立森林文化アカデミー	富田 宇男	
沖中 美保子		中澤 朋代	松本大学
上平 尚	全日本スキー連盟	中島 照雅	ひだ位山ふるさと学校
川島 伸行	キャリア開発支援センター	長田 圭司	アウトドアサポートシステム
加藤 昌孝		長谷川 智宏	岐阜県 BBS 連盟
川尻 秀樹	森林インストラクター岐阜	平野 達也	日本エコツーリズム協会
河原 誠二	南飛騨健康増進センター	平野 晃次	NPO法人長良川環境レンジャー協会
梶浦 敬一	岐阜県哺乳動物研究会	松下 眞知	天生県立自然公園ガイド
北川 健司	NPO法人エヌエスネット	水野 光良	グリーン体験塾
小林 由幸		三島 真	山と川の学校
小木曾 賢一	森林たくみ塾	三浦 嘉門	メタセコイアの森の仲間たち
佐々木 夕		水田 理沙	NPO法人長良川環境レンジャー協会
柴田 甫彦	NPO法人長良川環境レンジャー協会	村上 欣央	メタセコイアの森の仲間たち
重 政子	自然体験活動推進協議会	森田 えみ	京都大学医学研究科
田中 伸一	郡上市立川合小学校	八尾 哲史	岐阜県立森林文化アカデミー

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会長 北川 健司(エヌエスネット)

今回の催しの前夜から、飛騨地方は激しい雪に見舞われました。「次回は、飛騨で」そう決めていましたが、実行委員はみなこの時期の乗鞍青年の家周辺の雪を心配していました。ゲストの入りや参加者のキャンセルなど心配しながら、前夜は遅くまで、実行委員とボランティアの学生などは受け入れの準備をしました。結果は、1組の参加者と1人のゲストが不慣れな雪のため途中引き換えしたと連絡がありました。それ以外はほぼ予定どおりの出席者が集まりました。飛騨の方は自宅の雪どけ等の作業を残して、美濃からの方は不慣れな雪道の中を集っていただけました。集いの日、この催しに対する期待の大きさを実感しました。

今回は、2005年2月に開催した第1回の「県内の自然体験活動を行なう団体や指導者が集う」目的から、「さらに内容より深める、広げる、掘り下げる」ことを目的にしました。第1回は初めての催しにもかかわらず180名の参加者を得ました。そして第2回は、山深い乗鞍の山麓に2日間大雪の中、120名の方の参加を得ました。受付で次々に集まってくる方々を見ながら、岐阜県内のネットワークを求めて、熱い気持ちが雪の飛騨の地に集まってきていることを実感しました。各分科会などの報告にあるように、2日間各会場では積極的な参加があり、新しいつながりが芽生えていきました。共通する問題や各団体の抱える問題、現状と今後の取り組みなどそれぞれに得るものの多い機会になったと思います。

「出会い、知り合い、相互理解が進めば、岐阜県内の風通しはもっと良くなる」そう信じて、この催しを準備してきました。夜遅くまで語り合う人たちとともに時間を過ごす中、その思いは参加者に多くあったと感じました。この思いをもっと具体的なエネルギーに進めていくため、皆さんともに、この集いを続けていきたいと考えます。「第3回は、郡上で？東濃で？西濃で？」すでにそんな期待の声をいただいています。今後も、多くの方々のご意見と参画をお待ちしてします。